

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

“ テロリストに乗っ取られたJR東日本の真実特別版 ”

『月刊現代 - 私はなぜ「タブー」に挑んだのか - 』

第4回

『週刊現代』に続き『月刊現代』もJR東日本の革マル浸透問題を告発した。本紙は筆者の了解を得て、驚くべきこの事実をシリーズで紹介することとした。

ではなぜ「世界最大級の公共交通機関」JR東日本は、革マル派に支配されるに至ったのか。

ではなぜ、「世界最大級の公共交通機関」JR東日本は、革マル派に支配されるに至ったのか。その20年の歴史を改めて振り返ってみたい。「戦後最大級の改革」と賞賛され、今も政府の「行財政改革」のモデルケースとして取り上げられる国鉄改革。この改革を最終的に断行した中曽根内閣には「旧国鉄が抱えていた膨大な借金問題の解消」という最終目標と同時に、もう一つの狙いがあった。「日本最大・最強の労組」といわれた国労（国鉄労働組合）潰し。ひいては社会党の力の源泉となっていた総評（日本労働組合総評議会）の解体だ。この国鉄改革の“最大の障害”だった国労の力を殺ぎ、改革を加速させるため、当時、「改革三人組」と呼ばれた松田昌士（現JR東日本相談役、71歳）、葛西敬之（現JR東海会長、66歳）、井手正敬（元JR西日本会長、71歳）の三氏ら「国鉄改革派」は、旧民社党系で労使協調路線を採っていた旧『鉄労』（鉄道労働組合）だけでなく、当時から「革マル派の最高幹部」といわれてきた松崎率いる旧『動労』（国鉄動力車労働組合）とも手を握ったのだ。1936年、埼玉県東松山市に生まれた松崎は、川越工業高校卒業後の55年、旧国鉄に就職。その後、動労に加入し、61年に動労中央本部の初代青年部長に就任。85年には動労トップの中央執行委員長に就き、国労より過激な闘争で当時の国鉄関係者から「鬼の動労」と恐れられた組織を率いた。

だが、松崎にはもう一つの顔がある。「革マル派最高幹部」としてのそれだ。国鉄に就職した年に日本共産党に入党した松崎は、革共同（日本革命的共産主義者同盟）の指導者で、革マル派の“教祖”といわれた「クロカン」こと故黒田寛一氏（昨年6月に死去。享年78歳、以下敬称略）に師事。59年には黒田と共産党を離れ、革共同の分裂後も黒田と行動を共にし、革マル派を創設した。「倉川篤」というペンネームで副議長を務め、黒田に次ぐ2の地位に就き、革マル派内では、「理論の黒田、実践の松崎」といわれた。しかし前述の通り、70年代後半まで国鉄当局と激しく対立していた松崎も、国鉄改革派の攻勢に「分割民営化は不可避」と判断。「組織防衛」のため、それまでの方針を百八十度転換し、分割民営化賛成に回った。そして、いち早く分割民営化に賛成を表明していた『鉄労』（鉄道労働組合）など3労組とともに『鉄道労連』（全日本鉄道労働組合総連合会、『JR総連』の前身）を結成。その後、この鉄道労連の下部組織である『東鉄労』（東日本鉄道労連、JR東労組の前身）の委員長に就任する。